

『映画教室』 社会科に視覚教具をどう利用したか

一九四九年四月号（日本映画教育協会）

目を養う教育の方法について

中央教育研究所 矢口 新

われわれは、すべて同じ世界にすんで同じものをみているなど簡単に考え勝ちであるが、決してそうではない。誰も同じものなどを見て居はしない。否、同じものを見ているかも知れないが、同じに見ているのではないと言いかえた方が正確であろう。同じものをみても見る人によってまるでちがったものとして見られているのである。節穴のような目もあれば、顕微鏡のような目もある。顕微鏡のような目といても、ばいきんを見ることが出来るということではない、ただ目につる映像だけでなく、それを或は他の映像と比較し或は連関づけ、組合せ、その映像の表側にはなかった意味をちゃんと描き出して、世界を構造づける目を言うのである。

世界を見る目があるかないかはその人の生活能力を直ちに決定するといっても過言ではない。日本人は一般に現在この世界を見る目が養われていない。眼前の事に促われて先を見ないというのもそうであり、政治家が我党を考えて国民を考えないというのもそうであり、右か左か以外に物を考えることが出来ないのもそうである。そうしたこれらの性格は、皆過去の教育が徒らに言語主義に走り、単に頭の中に概念をつくって物を見させようとしたからである。物に応じて物を見

る、さまざまな距離にピントを合せることの出来る目を養わなかったせいである。

前置きが長くなったが、社会科の学習に最近視覚教育ということがやかましく論ぜられるに至った理由は以上のような点から教育が考え直された結果である。一度見て置けば忘れないからという視覚教育もないではないが、少くとも本質的なねらいはそんな所にあるのではない。ただ見せるだけが視覚教育のねらいではない。むしろ見せ方の問題である。どうしたらよい目を養うことが出来るかという見地から見せてやる心構えが教師になれば、見せても余り役に立たない。

ここに三人の先生方がそれぞれ苦心して、様々な見せ方を実施されている。それぞれの見せ方がどんな意義をもっているかを考察して見たい。南山小学校の高萩先生は、どんな見せ方をされたらどうか。まずみんなが学習の項目を相談した。それぞれのグループが問題をはつきり認めたわけであろう。例えばB班は陸上、海上、空の乗物のうつきりかわりを調べるといふ課題を確認した。その上で「車の進化」「物を運ぶ工夫」「昔の船と今の船」といふ幻燈を見せたのである。いや生徒が自分でこれらのものを見たのである。そうして自分達の問題である乗物のうつきりかわりはどうであるかといふことを調べて行った。恐らく紙芝居にしたり絵巻物にしたりしてまとめたのである。これは子供達で自覚して物を見なければ見た事にならないといふ事を基礎に置いて行われた学習である。

ただこの場合乗物のうつきりかわりを見ると自覚して、乗物のうつきりかわりの幻燈をみたといふ事だけで、果して子供にどれだけ目を養わせたかといふ事が問題である。高萩先生の説明にはその点の指導の仕

方は明らかでないが、ほおっておけば子供は幻燈を自分の紙芝居にそのままうつしてしまうだけの事しかしないかも知れないのである。これは確かに高萩先生のいわれるように思考力を失う結果になるであろう。そういう危険が感ぜられるとしたら、これは見せ方に問題があるといわねばならない。視覚教育は本来思考力を養うものである筈だから、その反対のおそれがあるというのは指導に問題があることを暗示するものがあると思う。

自覚的に見るといふにとどまらず、一步進めて自己の問題を以て見させる指導が行われる所に目を養う教育の本義がある。子供が本当に自己の問題をもつという事が大切である。乗物のうつりかわりをしばらく子供が自ら意識して、それに関する幻燈をみたとしても、それは発端であってそれで放置しておけば子供は自己の問題をもたないで対象にひきずられてしまうのである。そうすれば目を養うことは出来ない。対象から一度目を離して自分の世界を構成して、その中へ対象を位置づけるという仕事をしなくてはならない。それではじめて自分の目で物をみた事になるのである。

この点については尼崎先生の指導の仕方は即ち見せ方は適切なものがあつたようである。子供達が何れも、対象をそのまま受容しただけでは問題の解決にならないような課題をもたされているからである。子供達の問題は単に、何々をしらべようということではなく、より深く全体の生活構造の中に位置づけられているようである。即ち自分達の町の歴史を問題にしようとしたり、自分達の町の駅に於て、交通の基礎をみようとしたりしている事である。これは結局は自分の目を物をみなければ解決出来ない問題である。この問題を背負つて子供達

が物をみるときに、常に自立的な目が活動するであろう。

尼崎先生は子供達が、自分達の問題をもつて紙芝居をつくったり、ジオラマをつくつたりする時に、何十回となくおなじものをみて、だんだん見方が細かくなって行き、それにつれて子供達自身の制作もまた細かくなっていったと言つて居られる。これは非常に面白いことで、ここに目を養う姿が出ていふと思う。それは幻燈をみて、或は絵をみて、これをただうつしとつたりする作業とは根本的に異なつた生きた活動である。目が成長してゆくのである。

併し尼崎先生の報告をみると、三年生にしては何れも教材が高い程度でありすぎて、労多くして効少ないものであつたろうことが考えられる。それは一つには低学年向きの教材となる映画幻燈が作られていないことである。

もう一つ考えさせられることは、尼崎先生のように幻燈や映画を使うとなると、今までの教材観でつくられたものだけでは足りないであろうということである。即ち知識的な教材観でつくられたものだけでは、子供は不満に思うのではないだろうか。場合によっては或る一点だけが需要で他の知識はいらないというのかも知れない。それはそれでよいとしても、恐らく子供は物を見るときの方のわかるものをほしがるとはならないだろうか。而も子供の生活に突込んだものをである。これは教材としての映画幻燈を製作する場合考えなければならぬ問題であらう。

伊東先生の場合はまたいろいろの問題を提示している。目を養う最も高い段階は、自らの眼力を以て見た世界を再構成することである。一枚の絵を書くこと、一つのジオラマをつくることももちろん再構成

であるが、伊東先生の場合のように、上学年で歴史的なものを取扱って幻燈をつくるとなるとこれは相当な高い作業である。尾崎先生の場合の紙芝居の場合は何といつても三年生であり、そこに取扱われる内容にも限界があるが、五年生にもなれば、指導の仕方によっては、かなり深く世界をみる目を養うことになるであろう。ただ船の系列がならべられただけなのか、或は別なものであったのか、この叙述ではわからないけれども、歴史の世界に子供の目を向けさせるための指導がどのようなものであったかが知りたいと思う。船の系列をならべただけでは、丁度、幻燈をつくる前にやった模型つくりと同様に、子供は結局現在に於ける羅列しか見ないのであつて歴史的な目を養うことは出来ないであろう。

伊東先生は、子供に展覧会を見学させて居られるが、ここでどんな風にして、目を養おうとされたのだろうか。ただ見に行つて子供が説明書きをノートに筆記して来ただけだろうか。現物や現場の模型などの構造づけて陳列されたのをみたとき、これを如何に見るかの指導は極めて大切である。これが本当にみられれば、目は養われていると言ふべきである。

この展覧会で見たものが土台となつて、学習が發展した事は極めて、意義のあることであるが、問題はこの場合に展覧会をただ模倣したのか、自分の問題を中心として再構成したのかという事である。見て来たものを抽出して絵にかいたり、ならべたりしたのであればこれは充分な目を養うことにならないであろう。これは高萩先生の場合と同じく子供が自己の問題をもっているかどうかということにかかつて来ると思ふ。

要するに目を養う教育はもっと子供の生活の問題をえぐり出さなければ本格化しないであろう。子供が何かをみたいと言うので何かをみせた、或は子供に何かみせて、その後でそれを絵に書いたり感想を言つたりしたというのはまだ物を見る目を養う教育の所へ行つていない。それは何れも子供の真の問題にふれていない。子供は教室に入つたり、先生に向つたりしたら、既に或る構えをする。それは多くの場合子供の生活構造全体からみると極めて特異な構えである。それは学校や教室という場が生み出す心理的構造である。ここできりに子供が問題を出したとしても、それを無条件に子供の問題として認めるわけには行かないであろう。そういう問題をもつて子供が物をみたとき果して真に目を養うことになるかはよく考えなければならぬ。子供がただ受容しようという構えで物を見て居れば、いくらみせても目は養えない。ただその時教師の指導が適切に行われて、子供が自分の生活問題からそれを見るように刺戟が与えられるならばはじめて目が出るのである。

子供を学校や教室の概念から解放して、生活の中に置いてやることは、視覚教育の目的から言つても最大の急務である。